

委託事業実施内容報告書

平成28年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 【地域日本語教育実践プログラム(B)】 実施内容報告書

団体名: 認定特定非営利活動法人 教育活動総合サポートセンター

1. 事業の概要

事業名称	ともに学ぶ日本語学習支援事業
事業の目的	対話型の活動を通して、外国につながる子どもたちや外国人等市民は、自分の気持ちを日本語で書いて表現する力や生活に必要な情報を読み取りやさしい日本語に言い換えるプロセスで日本語を習得する。日本人市民や行政関係機関の職員は、地域に住む外国につながる子どもたちや外国人等市民の課題を知り理解を深め、ともに学びあう。地域で外国人市民が排斥されることがないように、対話型の活動を通して、市民同士の関係性、さらに行政関係機関との関係を深め多文化共生のまちづくりに寄与する。
日本語教育活動に関する地域の実情・課題	①川崎市の外国人市民の国籍は120カ国以上にわたり、分散して居住していて、同国人のコミュニティも少ない。また外国籍年齢別人口では、0～4歳が10～14歳の2倍に増えている。さらに外国につながる子どもたちを含めるとその数は倍以上になり、日本生まれの子どもたちも増えている。多文化環境での子育てや子どもの教育に関する情報が十分でないことに加え、親たちは日本語でのコミュニケーションが十分でないため、社会参加できず孤立してしまうこともあり、公的サービスを十分受けられないこともある。②地域の日本語学級では話すことが中心で、読み書きの力を身につける機会は十分でない。情報を読み取り、国との違いを意識して書いたり、書くことを通して自分のことを見つめ直す機会は少ない。③地域日本語教育に関する現状や課題が地域に発信できていない。④日本語学級等で長く学んでいて日本語でのコミュニケーション能力が高いバイリンガル外国人市民が地域の多文化共生のまちづくりの担い手として、社会参加できない外国人等市民のエンパワメントを支えたり、活躍できるような場および日本語のさらなる学びの場をつくる必要がある。
本事業の対象とする空白地域の状況	
事業内容の概要	①外国につながる児童生徒(小学校高学年以上)や外国人等市民が対話型の活動を通して、自分の経験や思い、主張などを日本語で書いて語り、表現する講座を行う。また、同時に多文化共生のまちづくりの担い手となる地域住民(母語話者)が日本語パートナーとして、外国人等市民(日本語学習者)と対話ができるよう人材育成もめざす。自分の経験や思い等の語りをデジタルストーリーテリング(DST)の手法により映像作品を制作し、地域に住む外国人等市民の声として、地域住民や行政関係機関などの職員に向けて上映会・対話会を行い地域の課題等について話し合う。 ②外国人等市民およびその子どもたち(日本語学習者)が、地域で健康で、安全安心に暮らせるよう子育てや地域の情報等を『やさしい日本語』に書き換える。そのプロセスを通して、生活に必要な情報を得るとともに、日本語とその背景にある日本特有の文化も学ぶ。ゲストティーチャーとして、保健師や区民課等の外国人等市民と直接関わることの多い行政関係機関の職員や養護教諭、警察官などに参加してもらう。外国人等市民(日本語学習者)と地域住民(母語話者)がともに、生活する上での課題も考える機会にする。また行政関係機関や教育関係機関の職員と外国人等市民とが『やさしい日本語』を学ぶ場をつくる。外国につながる幼児(日本生まれも含む)やその親を対象にした親子教室で、『やさしい日本語』で日本の学校文化や制度、入学前に身につけておきたいことについて学び、その親と教育機関関係者がともに学ぶ場もつくる。
事業の実施期間	平成28年6月～平成29年3月 (10か月間)

2. 事業の実施体制

(1) 運営委員会

【運営委員】

1	森下 和子	公益財団法人川崎市国際交流協会
2	須山 佳代子	川崎市総合教育センター
3	三枝 正孝	川崎市地域日本語教育推進協議会
4	田村 豊	川崎市幸区役所
5	佐藤 忠	川崎市幸区役所生涯学習支援課(幸市民館)
6	樋口 万喜子	NPO日本語・教科学習支援ネット
7	須摩 修一	DST研究所
8	池田 恵子	幸区多文化共生推進事業実行委員会
9	東條 光一	認定特定非営利活動法人教育活動総合サポートセンター
10		



【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	平成28年6月2日 (金) 10:00～12:00	2時間	幸市民館	森下和子、佐藤忠、須摩修一、池田恵子、東條光一	1. 本年度事業計画の説明: 昨年度の課題の検討 2. 各取組の運営について検討
2	平成28年10月4日 (火) 13:30～15:30	2時間	幸市民館	森下和子、島田道雄(須山佳代子代理)、三枝正孝、佐藤忠、樋口万喜子、須摩修一、池田恵子、東條光一	1. 本年度事業経過報告: 各取組の実施内容、活動の様子、学習者の様子・感想、課題 2. 各取組の地域への広がり、連携の検討
3	平成29年2月28日 (火) 13:30～15:30	2時間	教育会館	森下和子、須山佳代子(代理: 島田道雄)、三枝正孝、佐藤忠、樋口万喜子、須摩修一、池田恵子、東條光一	1. 本年度各取組実施報告: 活動内容と参加状況、学習者・サポーターの様子・反応、各取組の活動の地域への普及状況 2. 評価: 各取組の日本語教育として、行政機関等との連携、日本語教育の地域への発信、事業全体として体制整備、地域連携について

(2) 地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	取組1は幸市民館で活動する日本語学級、幸区多文化共生推進事業実行委員会、にほんごワールド、幸国際子育てクラブトントンおよび川崎市国際交流協会と協働で、DSTの上映会や事業の報告会を行う。外国人市民の思いや背景を知り、やさしい日本語で話すことや相手の日本語のレベルに合わせて話す・伝える必要性や手段を学び、その後のそれぞれの活動に活かす。地域では幸区多文化共生推進事業実行委員会との連携で多文化共生講座として実施する。DSTの手法で日本語が学べるよう基本事項をマニュアル化し、広く活用できるようにする。取組2では、幸区役所保健福祉センターの保健師や学校の養護教諭、警察署員と、「やさしい日本語」にするポイントやプロセスをすでに共有している。「やさしい日本語」をもっと広めるため、行政機関の職員研修や保育園の保育士の研修等で外国人とともに学び、「やさしい日本語」を取り入れてもらう。多文化共生のため市役所・区役所、地域住民、川崎市内の日本語学級のボランティアや日本語指導等協力者、区役所や教育委員会などと連携し、研修の一環として職員からも参加者を募る。
------	--

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

本事業の実施体制	取組1『もっともっと伝えよう！自分の気持ち』対話して書くプロジェクトは、自分のことを語り、書くことを中心とした日本語指導を袴田氏が担当する。(A1)対話型の活動を通し、日本語学習者が自分のことを語り、構成を考えながら書くことに慣れる。(B)書くことに抵抗がなくなった学習者がデジタル・ストーリーテリング(DST)の作品づくりに取り組む。作品の上映会・対話会を実施し、地域住民や行政職員や教員など地域の課題等について話し合いを行う。(A2)DST作品を制作するプロセスで、学習モチベーションが向上した学習者に対し、さらに自分のことを語り、書く学習を実施する。	取組2『やさしい日本語でコミュニケーション』プロジェクトでは、古屋氏がガイダンスおよび外部講師との連携、保育士や行政職員向けの研修、および親子教室でやさしい日本語への書き換えのプロセスにおける日本語指導を担当する。川崎では、自分のことを日本語で表現したり、情報を読み取ったりするのは、生活者の外国人市民にとって必要なことであるが実践例が少ない。そこで日本語教育として、日本語サポーターの役割や関わり、生活者の外国人市民にとって書くことや音声で伝えることの意義、そして外国人市民の社会参加などについて、中核メンバーがそれぞれ受け持つ講座でどう関与できるのか考え、検討する。DST研究所や外部講師との連携するために取組連携会議を実施する。また、地域住民とともに学ぶ意義を考え、DST研究所が持つ作品制作・上映会・対話会等に関するノウハウを日本語教育の中でどう活かせるかや国語教育での蓄積も応用する。指導者と補助者が連携することで、地域の外国につながる子どもたちも含め外国人等市民が自分のことを安心して語れる場にしたい。安心できる場で承認されることで自己理解が進み他者との関係も変容し、自律し社会参加することにつなげていきたい。
	取組3『やさしい日本語でコミュニケーション』プロジェクトでは、古屋氏がガイダンスおよび外部講師との連携、保育士や行政職員向けの研修、および親子教室でやさしい日本語への書き換えのプロセスにおける日本語指導を担当する。川崎では、自分のことを日本語で表現したり、情報を読み取ったりするのは、生活者の外国人市民にとって必要なことであるが実践例が少ない。そこで日本語教育として、日本語サポーターの役割や関わり、生活者の外国人市民にとって書くことや音声で伝えることの意義、そして外国人市民の社会参加などについて、中核メンバーがそれぞれ受け持つ講座でどう関与できるのか考え、検討する。DST研究所や外部講師との連携するために取組連携会議を実施する。また、地域住民とともに学ぶ意義を考え、DST研究所が持つ作品制作・上映会・対話会等に関するノウハウを日本語教育の中でどう活かせるかや国語教育での蓄積も応用する。指導者と補助者が連携することで、地域の外国につながる子どもたちも含め外国人等市民が自分のことを安心して語れる場にしたい。安心できる場で承認されることで自己理解が進み他者との関係も変容し、自律し社会参加することにつなげていきたい。	取組3『やさしい日本語でコミュニケーション』プロジェクトでは、古屋氏がガイダンスおよび外部講師との連携、保育士や行政職員向けの研修、および親子教室でやさしい日本語への書き換えのプロセスにおける日本語指導を担当する。川崎では、自分のことを日本語で表現したり、情報を読み取ったりするのは、生活者の外国人市民にとって必要なことであるが実践例が少ない。そこで日本語教育として、日本語サポーターの役割や関わり、生活者の外国人市民にとって書くことや音声で伝えることの意義、そして外国人市民の社会参加などについて、中核メンバーがそれぞれ受け持つ講座でどう関与できるのか考え、検討する。DST研究所や外部講師との連携するために取組連携会議を実施する。また、地域住民とともに学ぶ意義を考え、DST研究所が持つ作品制作・上映会・対話会等に関するノウハウを日本語教育の中でどう活かせるかや国語教育での蓄積も応用する。指導者と補助者が連携することで、地域の外国につながる子どもたちも含め外国人等市民が自分のことを安心して語れる場にしたい。安心できる場で承認されることで自己理解が進み他者との関係も変容し、自律し社会参加することにつなげていきたい。

3. 各取組の報告

＜取組1＞										
取組1	取組の名称		『もっともっと伝えよう！自分の気持ち』対話して書くプロジェクト							
	取組の目標		自分の思いや気持ちを語り書く対話型の活動を通して自己表現の日本語を学ぶ。デジタル・ストーリーテリング(DST)作品の上映会・対話会で地域住民や行政関係機関や教育・福祉関係機関の職員と言語的マイノリティーの抱える課題を共有する。対話型の活動を通し、市民同士の関係を築く。日本語サポーターは、取組を通して相手にあわせて話す力、質問する力を磨く。							
	取組の内容		外国につながる子どもたちや外国人市民が自分の経験や思いや考えを日本語で言語化できるよう対話活動を行い、文書かDSTで自己表現する。 A(A1 & A2の2回) 話して書くワークショップ: 自分のことを語り、書くことを学ぶ。日本語パートナーも自分のことを書く。そのプロセスを通して、お互いに対話のあり方を学ぶ。 B DSTワークショップ: 経験や出来事について気持ちとともに、自分物語を書き、自分の声で録音し、画像をあわせ、聞き手を意識したDST作品を制作する。上映会・対話会を実施し、観客である地域住民や行政関係機関や教育関係機関の職員とともに言語的マイノリティーが抱えている課題について考える。外国につながる子どもたちや外国人等市民は日本語のレベルアップとともに自尊感情を高め、社会参加の一歩へとつなげる。プロジェクトを通して住民同士がつながり、日本人とか外国人とか関係なく市民として横の関係を築けるようなきっかけをつくる。							
	☐	空白地域を含む場合、空白地域での活動								
	取組による体制整備		外国人等市民が自分の経験や思いを語り、伝えることの大切さの理解を広めるために、川崎市内・近隣地域の日本語学級などでDST上映会を行う。地域の言語的マイノリティーの課題を共有するため地域住民や行政関係機関や教育・福祉関係機関向けに上映会を行い、連携・協力体制を考える。書くことは考えることに深く関わり、外国につながる子どもたちや外国人市民の自立にもつながり、地域の活動団体との連携で社会参加のきっかけをつくる。また、にほんごワールドとの連携で日本語サポーターの育成を実施したい。							
	取組による日本語能力の向上		対話を通して、経験や思いを人に伝えられるよう整理し、日本語で言語化し書くことを学ぶ。自分の伝えたいことを相手により伝わりやすくなるよう構成も考える。書くことを通して日本語の文法や文型をより確かなものにする。自分の声で読んだり、録音したりするため、音声で分かりやすく伝える方法を学ぶ。映像編集で日本語によるメディアリテラシーも学ぶ。上映会では大勢の人に向けて話すことを学ぶ。地域住民や行政職員等と日本語で対話するための重要な語彙や運用能力も身につける。							
	参加対象者		川崎市およびその周辺に居住する外国人市民・日本人市民とその子どもたち				参加者数 (内 外国人数)		75人 (24人)	
	広報及び募集方法		市政だより、市民館だより、チラシ、HP、メーリングリストなど							
	開催時間数		総時間 58 時間(空白地域 時間)							
主な連携・協働先		公益財団法人川崎市国際交流協会、社会教育ボランティアグループ「にほんごワールド」								
開催場所		川崎市幸市民館、川崎市国際交流センター、さいわい健康福祉プラザ、幸区市民活動コーナー								
参加者の出身・国別内訳 (人数)		中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ	ブラジル	
		9人	2人		2人	2人		1人		
		アルゼンチン(1人)、メキシコ(2人)、ベネズエラ(1人)、ペルー(2人)、オーストリア人(1名)、中国帰国者(1人)、日本人(51人)								

実施内容								
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容	指導者名	補助者名
1	平成28年6月7日 (火) 10:00～12:30	2.5	幸市民館	6	お互いを知るために	自己紹介。スケジュール、活動概要、サポートの姿勢を説明する。マインドマップのデモンストレーション、シミュレーションをする。感想を書く。サポーターのコメントをもらう。	袴田陽子	加藤真帆子 荒明美奈子
2	平成28年6月14日 (火) 10:00～12:30	2.5	幸市民館	20	お互いを知ろう(私の すきな○○)	活動の目的、活動を説明する。2グループに分かれ、自己紹介をする。マインドマップ作成する。感想を書く。サポーターのコメントをもらう。	袴田陽子	加藤真帆子 荒明美奈子 孔敏淑
3	平成28年6月21日 (火) 10:00～12:30	2.5	幸市民館	10	自分のことをもっと伝えよう	マインドマップをさらに広げたり、深めたりする。誰に伝えたいかを考える。マインドマップの中から一番伝えたいエピソードを選ぶ。そのエピソードを大きめの付箋に詳しく書く。感想を書く。サポーターのコメントをもらう。	袴田陽子	荒明美奈子 孔敏淑 池田恵子
4	平成28年6月28日 (火) 10:00～12:30	2.5	幸市民館	15	構成を考えて、書こう	構成を考える(付箋に書いた一番伝えたいエピソードに関係のあるエピソードを1～2つ選ぶ。付箋を入れ変えたり推敲する。初めと終わりを考える)。小グループで読み合わせをする。感想を書く。サポーターのコメントをもらう。	袴田陽子	加藤真帆子 荒明美奈子 孔敏淑
5	平成28年7月5日 (火) 10:00～12:30	2.5	幸市民館	14	書いて、読もう	写真をつけて清書する。読む練習をする。感想を書く。サポーターのコメントをもらう。	袴田陽子	加藤真帆子 荒明美奈子 孔敏淑
6	平成28年7月12日 (火) 10:00～12:30	2.5	幸市民館	13	書いたことを読もう	読む練習をする。作文を読み合う。文集を作る。感想を書く。サポーターのコメントをもらう。	袴田陽子	加藤真帆子 荒明美奈子 孔敏淑
7	平成28年9月4(日) 13:30～16:00	2.5	川崎市国際 交流センター	12	オリエンテーション・ 初めての人と知り合 おう	あいさつ、自己紹介、作品上映、感想を言う、活動の概要について説明する。サポーターとお互いに感想を書く。	袴田陽子	片桐文雄 孔敏淑 須摩修一 池田恵子
8	平成28年9月11日 (日) 13:30～16:00	2.5	川崎市国際 交流センター	6	DST作品制作のため に	活動内容の確認をする。マインドマップのデモンストレーション、シミュレーションをする。サポートの姿勢、役割を確認する。	袴田陽子	片桐文雄 荒明美奈子 孔敏淑
9	平成28年9月18日 (日) 13:30～16:00	2.5	川崎市国際 交流センター	10	グループで話し合お う	ストーリーサークルで話す、聞く、感想を言う、質問する。感想を書く。サポーターは話をよく聞く。コメントを書く。	袴田陽子	片桐文雄 孔敏淑 須摩修一 池田恵子 荒明美奈子
10	平成28年9月25日 (日) 13:30～16:00	2.5	川崎市国際 交流センター	13	自分のことをサポー ターに伝えよう	サポーターと一緒にマインドマップを作成する。話したことを発表する。感想を書く。サポーターもコメントを書く。	袴田陽子	孔敏淑 須摩修一 池田恵子
11	平成28年10月10日 (月) 13:30～16:00	2.5	川崎市国際 交流センター	7	文章を書いて、読もう 1	サポーターとマインドマップをさらに広げ、深める。付箋に一番伝えたいエピソードを詳しく書く。関連のあるエピソードを1～2つ選ぶ。文章を書く。読む練習をする。感想を書く。	袴田陽子	片桐文雄 荒明美奈子 孔敏淑 須摩修一
12	平成28年10月30日 (日) 13:30～16:00	2.5	川崎市国際 交流センター	8	文章を書いて、読もう 2	サポーターと初め、中、終わりの構成を考える。文章を書く。サポーターと推敲する、気持ちが伝わるよう読む。参加者の文章を聞いて感想を言う。感想を書く。サポーターもコメントを書く。	袴田陽子	片桐文雄 荒明美奈子 須摩修一 池田恵子
13	平成28年11月6日 (日) 13:30～16:00	2.5	川崎市国際 交流センター	13	DST作品の編集をし よう(声で伝えよう・ 画像で伝えよう)	サポーターと意味・気持ちが伝わる読み方の練習をする、録音する、PC編集をする。感想を書く。サポーターもコメントを書く。	袴田陽子	片桐文雄 荒明美奈子 孔敏淑 須摩修一 下地直人
14	平成28年11月13日 (日) 13:30～16:00	2.5	川崎市国際 交流センター	14	自分の声と画像で自 分を表現しよう	音声を聞きながら写真を選ぶ。PCで編集をする。感想を書く。サポーターもコメントを書く。	袴田陽子	片桐文雄 荒明美奈子 孔敏淑 須摩修一 下地直人
15	平成28年11月20日 (日) 13:30～16:00	2.5	川崎市国際 交流センター	11	制作者同士の試写 会	人の前で自己紹介をする練習をする。作品の紹介、工夫したところを伝える練習をする。他の作品を見て感想を言う。感想を書く。サポーターもコメントを書く。	袴田陽子	片桐文雄 須摩修一 池田恵子

16	平成28年11月23日 (水) 13:30~16:30	3	川崎市国際 交流センター	48	上映会 & 対話会	主旨説明、活動紹介をする。2会場に分かれて上映会を行う。視聴者の前で自己紹介、作品の紹介をする。作品の上映をする。視聴者の感想を聞く。質疑応答をする。各会場、2グループずつに分かれて視聴者と対話をする。	袴田陽子	片桐文雄 荒明美奈子 孔敏淑 須摩修一 池田恵子 加藤真帆子 下地直子
17	平成28年11月27日 (水) 13:30~16:30	2.5	川崎市国際 交流センター	9	ふりかえりをしよう	サポーターと活動前と後の自分の変化(日本語・他者との関係)を考える。これからしたいことについて話す。感想を書く。サポーターもコメントを書く。	袴田陽子	片桐文雄 荒明美奈子 孔敏淑 須摩修一 加藤真帆子
18	平成29年1月17日 (火) 10:00~12:30	2.5	幸区市民活 動コーナー	4	お互いを知るために	自己紹介。スケジュール、活動概要、サポートの姿勢を説明する。マインドマップのシミュレーションをする。ふりかえりをする。	袴田陽子	荒明美奈子
19	平成29年1月24日 (火) 10:00~12:30	2.5	健康福祉ブラ ザ	10	お互いを知ろう	自己紹介(最近の様子も伝える)をする。テーマを決める。サポーターとマインドマップを作成する。小グループで話したことを共有する。感想を書く。サポーターからコメントをもらう。	袴田陽子	加藤真帆子 荒明美奈子 孔敏淑
20	平成29年1月31日 (火) 9:30~12:00	2.5	幸区市民活 動コーナー	10	書くことを考えよう	パートナーチェンジしたサポーターとマインドマップを見直し、さらにマインドマップを広げ、深める。誰に伝えたいかを考える。一番伝えたいエピソードを決める。付箋に書き出す。小グループで、書いたことを共有する。感想を書く。サポーターからコメントをもらう。	袴田陽子	加藤真帆子 荒明美奈子 孔敏淑
21	平成29年2月7日 (火) 10:00~12:30	2.5	健康福祉ブラ ザ	9	書いてみよう	一番伝えたいエピソードに関係のあるエピソードを1~2つ選ぶ。付箋に書き出す。サポーターと付箋を入れ替えて、初め、中、終わりで構成を考える。感想を書く。サポーターもコメントを書く。	袴田陽子	加藤真帆子 荒明美奈子 孔敏淑
22	平成29年2月14日 (火) 10:00~12:30	2.5	健康福祉ブラ ザ	10	もっともっと書いてみよう	下書きをする。サポーターと推敲をする。清書をする。読む練習をする。小グループで読む合う。感想を書く。サポーターもコメントを書く。	袴田陽子	荒明美奈子 孔敏淑
23	平成29年2月21日 (火) 10:00~12:30	2.5	健康福祉ブラ ザ	9	書いたことを読もう	サポーターと意味・気持ちが伝わるよう読む練習をする。作文を読み合う(何について書いたか、伝えたいことは何かを言ってから読む)。感想を聞く。他の人の作文について質問をする。感想を書く。	袴田陽子	加藤真帆子 荒明美奈子

(1) 特徴的な活動風景(2~3回分)

○取組事例①

【第6回 2016年7月12日】

- 音読練習をする。(前回のペアで)
- 学習者が作品を読みあう。感想を言う(全員で、ペアで隣り合って座る)。
 - 読む順番を決める。(希望を聞く)
 - 読む前に、制作者から一言言う。
 - 何について書いたか(～について書きました)
 - その中で伝えたいことはどんなことか(言いたいことは、～です・～ということです)
- タイトルと名前を言ってから読む。サポーターもコメントを読む。
- 全体から感想を聞く。
- 学習者に、作文を書く前と書いた後の気持ちを聞く。
- ふりかえり、アンケート記入



○取組事例②

【第16回 28年11月23日】

- 上映会の開会、挨拶をする。
- 主旨説明をする。
- 制作者が自己紹介をする。
- 2会場に分かれて、上映をする。
 - ①地域・人とのつながり(4作品)
 - ②人・できごとの出会いから(4作品)
- 各会場2グループずつに分かれて対話会を行う。
- 感想、質問をお互いにしあう。



(2) 目標の達成状況・成果

①A1・2、Bのいずれの活動でも、毎回参加者全体で意見交換の場を持ち、終了時アンケート・インタビューを実施したが、全体を通じて日本語学習者からは好意的な感想・意見が得られた。「活動の中で一番よかったこと」(活動A)として挙げられたのは「ペアで話して書く」ことである。対話型である点が評価されており、「テーマ・ポストイットに書く・文集を作る」など活動の手法がそれに続いた。手順の明確さ・わかりやすさが好評であった。聞き手に促され、問われて考える。答えたことへの聞き手の反応に刺激されて、さらに記憶が呼び起こされるという循環の中で「書きたいことが見えてくる・(考えが)整理される・あとで作文するとき役に立つ」と言うコメントが多かった。「はじめは大変だったが、どんどんやりかたがわかった・初めて作文作った・一人で絶対できない・先生が指導してくれてよかった・みんな親切にしてくれた・日本語らしい文を書きたかった・今回チャンスがあつてよかった・人とのコミュニケーション会話が喜びです」など、聞き手を得て話し合えたことに喜びを感じ、同時に、サポートを得て、言いたいことをきちんと伝わる日本語で書いたという達成感が感じられる。「初めて書いた・初めての経験で、話が深まった・普段できない経験がたくさんできた・ぜんぶ新しい」と言う声は、「書くこと」が初めてであるというだけでなく、自分自身の内面の再発見をしたということであるのかもしれない。なんといっても、活動中の参加者は解放感を感じているようで、生き生きとし、大声で話し、笑い、時に涙を流すこともあった。また「いっぱい日本語を覚えたいので、もっと書きたい、話したい・もっともっと話したい・もっとむずかしい文章を書いてみたい」と、多くの人が学習の意欲を述べている。「自分を伝える」「その日本語表現に自信が持てる」という画面で、よい結果を得た。

Bの活動でも発言やアンケートから、ストーリーサークルやマインドマップの過程で参加者同士がお互いについて知り、親しくなっていく様子が見える。制作者である日本語学習者から「ゆっくり話した方が伝わりやすいことがわかった・読み方、発音をなおしてもらった・文章の修正、映像について教えてもらった・日本語も皆の前で話すこともいろいろ成長した・(仲間の作品を見て)こんな人が身近にいるのはすごい」などの感想があった。新しい分野の知識を得たり、自分を省みたり、様々な生き方を教えられたり、普段の生活ではあまりできない経験をし、自分の世界の広がりを感じているようだ。

「これからやってみたいことはありますか」(活動B)という問いへの答えは、「これから、どの面で日本語を学ぶか」「どんな形で地域とつながりをもりたいか」に大別された。DST作品を作る過程は、自分の日本語を意識し、何ができて何ができていないかを確認する機会となった。もっと上達して積極的に発信することができれば、ほかのことも可能になるという期待と自信を持ち、それがこれからの日本語学習や人間関係づくり・仕事など社会参加の方向の模索につながっているように思われる。

スタッフおよび日本語指導者は、全体を見て回りながら、必要に応じて日本語サポーターと日本語学習者との間にたつて、対話のサポートや日本語指導の手助けに当たった。当初から参加しているスタッフによれば、DSTへ参加が2回目、3回目という人たちに今回、一定の「落ち着き」が感じられるという。思いが先行して奔流のような書きぶりであった前作に比べ、過去のできごとだけでなく今後への具体的な展望、地域の活動への参加の意欲が表明されるなどの変化があった。表情や仲間との付き合い、上映会での発言にも、以前とはちがう穏やかさと自信が見られるという意見である。学習者に起こるそうした変化を関係者も敏感に受け止め、長期的な展望のなかで見続けて行きたい。A2へもBの参加者が参加し、日本語の上達と内容の深まりが見られた。

② 一般への上映に先立ち、会場で制作者・サポーター・関係者が全作品を見て、上映会のイメージを持った。上映会では、今回制作したDST作品8本を2グループに分けて上映した。自己紹介のあと、制作者本人が自身の制作意図を述べ、上映後に観客からの感想を聞いた。対話会では制作者への多くの質問があった。作品を通じて、制作者の日本での経験や状況、いま考えていることを知ってもらうことができ、会場からの感想・アンケートでは「制作者の気持ちが伝わる・作品に励まされた・個性が出ている・伝わってくるものが多くて胸がいっぱいになる・写真や音楽の力もあり感動的・直接本人から話を聞くのは、受け止めかたが全くちがう」等、好意的な声が多く聞かれた。制作者もまた「(作品を通じて)自分の気持ちをわかってもらえた」と概ね感じているが、一方「質問はわかったが、気持ちを日本語で言うのはむずかしい」という感想があった。制作者本人の「対話会参加状況」についての意見にもっと耳を傾ける必要があると感じた。母語でない言語を操りながら伝えきれない苦しさを常に抱えているのが「言語的マイノリティー」であることも関係者と共有したい。

当NPOは制作者の承諾を得てDST作品の貸し出しを行っている。2016年11月～2017年2月までに、幸区役所・横浜国立大学・川崎市国際交流センター・教育文化会館・かわさき市民活動センター・県立高校等で12回の上映を行い、地域住民・市職員、学生、日本語講座の参加者、子育てグループ参加者等多くの方に見てもらうことができた。DST制作現場と上映会には神奈川新聞からの取材があり、同紙上でも取り上げられるなど、作品・制作者の紹介の機会が広がっている。

③ A1で、終始1対1で対応することに負担を感じるという声があったのを受けて、A2ではペアを固定しない方法を取り入れた。この結果、参加者全体が互いに何らかのかかわりを持つことが可能になった。学習者は複数のサポーターからサポートを受けることができ、サポーターは自然にどの参加者にも気を配るようになった。遠くからのあいさつや声掛けがうれしかったという声もあり、よい関係性が生まれた。一つのテーマを間にして長時間にわたり話し合う対話型の活動は、参加者どうしの距離を縮め、互いの生活、家族のこと、国での生活等もわかり、深く知り合う機会になった。休憩時間には、日本語学習の方法を話し合ったり、自分が参加している地域活動にさそい合ったり、住居が近いとわかって付き合いが始まったり、新たなつながりが地域の輪の中に広がっていく様子が見られた。

平成28年度は、A1・A2の活動で2冊の文集が完成した。文集は第1部と第2部からなる。第1部が日本語学習者による作文で、これにペアの日本語サポーターがコメントを寄せている。両者を含めて読んでもらうことで、書き手の状況がより伝わるようにと考えての試みである。第2部は日本語サポーター・スタッフの作文で、文集が関係者の協働で作られたものであることを提示している。

A・Bいずれの活動でも、サポーター・スタッフは仕事の合間や休日にも連絡を取り合い、あるいは直接会って確認を取るなどして、制作者の思いに沿った作品をつくるために労を惜しまなかった。前回前々回のDST制作者が今回はサポーターとしてA・Bの各活動に参加してくれたが、多くの局面で「バイリンガルサポーター」は、学習者・サポーター双方にとって頼れる存在となっている。

(3) 今後の改善点について

※取組の内容や実施体制などについて改善すべき点を具体的に記載すること。

・他の活動との連携——「日本語を書くクラスや時間があれば参加したいです」という活動後のアンケートの問いには、参加者全員が「参加します」と答えている。その意欲を次のステップへの動機づけとして学習が続けられるような流れを作りたい。日本語学習者の利点という観点から、定期的な地域の日本語ボランティアクラスと何らかの連携がとれるよう、相互的な位置づけを考える必要があるかもしれない。今後の参加者の募集を考える上でも、長期的な計画性が必要であろう。

・DST上映会、対話会の持ち方——時間的な制約、参加外国人の日本語理解・発話の力を考慮したサポート体制、個々の作品の主題と対話会のテーマの関連等を検討したうえで、会のねらいと進め方について十分な話し合い・準備の時間を持つ必要がある。さまざまな視聴者対象の上映の機会をさらに増やしていく。

・日本語のサポートに関して——募集・説明会・研修は今後も内容を検討していく。たとえば、日本語初級者との対応、書き手の個性や意図の尊重と訂正のバランスを考えた中上級者への対応などである。また、今回、DST上映会・対話会で日本語サポーターの役割がまだ明確でなく、かかわり方が曖昧になった反省を踏まえ、上映会・対話会での日本語サポーターの役割を考える。またその役割を考える時間の確保も課題である。

＜取組2＞										
取組2	取組の名称		『やさしい日本語でコミュニケーション』プロジェクト							
	取組の目標		地域住民(母語話者)や行政機関等職員とともに、行政や学校等からのお知らせを『やさしい日本語』に言い換えるプロセスを通して、情報を読み取る力や書く力をつける。同時に日本社会のルールや仕組みも知る。『やさしい日本語』を母語に翻訳したり、地域社会参加の足がかりとしたりする。日本語パートナー(サポーター)は、外国人等市民の課題を知り『やさしい日本語』でコミュニケーションできることをめざし、相互の共生意識を高める。							
	取組の内容		Aやさしい日本語で学ぶ:外国人等市民と地域住民(母語話者)が、対話型活動を通し、ゴミやリサイクルについてやさしい日本語で地域情報を学ぶ。 Bやさしい日本語研修:行政等関係機関の職員が、やさしい日本語について学ぶ。外国人等市民と対話型活動を通し、行政からの情報をやさしい日本語に書き換える。 C親子教室:次年度入学予定の子どもとその保護者が、就学前に身につけておく必要のある日本の学校文化や習慣等を学ぶ。保護者はやさしい日本語で、子どもの養育や家庭教育に関することを学ぶ。							
		空白地域を含む場合、空白地域での活動								
	☐ 取組による体制整備		取組に参加する参加する市職員等は、外国人等市民との対話型活動でやさしい日本語でコミュニケーションをとったり、やさしい日本語に書き換えるプロセスを通して、外国人等市民が日本語で情報を読み取るむずかしさや文化の違いを知り、外国人等市民への対応に活かせるような整備に活かしてもらう。地域住民(母語話者)がやさしい日本語で話す・伝えることの大切さについても考え、やさしい日本語でのコミュニケーションの必要性を広く普及する。また、『やさしい日本語』に書き換えた文書は、行政関係機関や教育・福祉関係機関から外国人等市民向けの案内として活用してもらう。その活動に参加する日本語能力の高いバイリンガル外国人等市民の社会参加の方法として、やさしい日本語に書き換えた文書をそれぞれの母語に訳す活動の体制整備も検討していきたい。							
	取組による日本語能力の向上		日本語学習の初級者は専門用語や漢語が多い行政等関係機関からの文書をやさしい日本語で言い換えたものから情報を読み取りながら、語彙等を学ぶ。日本語中上級者は、市職員等と対話をしながら、行政等関係機関などからの文集をやさしい日本語に言い換えるプロセスで日本語表現を学ぶ。							
	参加対象者		川崎市および周辺に居住する外国人等市民、日本人市民およびその子どもたち			参加者数 (内 外国人数)		103人 (31人)		
	広報及び募集方法		チラシ、HP、メーリングリストなど							
	開催時間数		総時間 17.5 時間(空白地域時間)							
	主な連携・協働先		川崎市市民文化局人権・男女参画室、多文化共生保育研究会、川崎市教育委員会、NPO日本語・教科学習支援ネット、幸市民館日本語学級、にほんごワールド、幸国際子育てクラブトントン							
	開催場所		幸市民館、川崎市役所庁舎、ミューザ研修室、川崎市立小学校							
	参加者の出身・国別内訳 (人数)		中国	ベトナム	ネパール	韓国	フィリピン	インドネシア	タイ	ブラジル
			15			2	7			
		その他の国は、国名と人数を記載してください。 ペルー(3人)、ベネズエラ(2人)、メキシコ(1人)、中国帰国者(1人)、日本人(72人)								
実施内容										
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	取組テーマ	内容		指導者名	補助者名	
1	平成28年8月3日 (水) 9:30~12:00	2.5	幸市民館	19	ゴミをダイエツ	川崎生活環境事業所職員によるガイドダンス。ゴミのクイズをしながら分別を学ぶ。質問をする。ゴミに関する語彙を学習する。		古屋恵子	加藤真帆子 荒明美奈子 池田恵子 片桐文雄	
2	平成28年8月10日 (水) 9:30~12:00	2.5	幸市民館	17	私の国と同じです／違います	資源物・小物金属・ミックスペーパーなどの分別に関する語彙のクイズ。自分の国との違いを話す。やさしい日本語に言い換える。粗大ゴミの申し込みの電話の練習。		古屋恵子	荒明美奈子 池田恵子	
3	平成28年8月17日 (水) 9:30~12:00	2.5	幸市民館	14	今日からあなたもリサイクル名人！	3Rの日本語とその意味を学ぶ。リサイクルに関する語彙について日本語サポーターと考える。文型(～になります/変わります)を学ぶ。民祭協力を知る。次週の事前学習。		古屋恵子	加藤真帆子 池田恵子 片桐文雄	
4	平成28年8月24日 (水) 9:30~12:00	2.5	クレハ環境	16	ゴミ処理の施設見学	担当者の説明を聞く。日本語サポーターとペアで見学。ふりかえりをする。アンケートに答える。		古屋恵子	加藤真帆子 荒明美奈子 池田恵子	
5	平成28年10月12日 (水) 14:00~17:00	3	川崎市第4庁舎	40	やさしい日本語～より多くの人に伝えるために～多文化共生都市川崎の取り組み	川崎市の外国人住民に関する基本情報や外国人の日本語や言語行動に関する意識調査の説明。やさしい日本語への書き換えルールなどのガイドダンス。やさしい日本語に書き換えるワークショップ。		古屋恵子	荒明美奈子 池田恵子 孔敏淑 片桐文雄 東條光一 樋口万喜子	

6	平成28年10月28日 (金) 19:00~20:30	1.5	ミューザ川崎 研修室	24	やさしい日本語を一緒に学びましょう	外国人に伝わりにくい言葉をグループで考える。やさしい日本語にするルール、ポイントを学ぶ。実習。	古屋恵子	荒明美奈子 池田恵子 孔敏淑
7	平成29年2月15日 (水) 15:00~16:00	1	川崎市立宮 前小学校	5	親子教室1	(保護者)いろいろなあいさつ、対人関係をよくする言葉を学ぶ。日本の学校についての質疑応答/(子ども)絵本の読み聞かせ。あいさつ(おはよう(友だち)・おはようございます(先生など))・返事の仕方を学ぶ。自分の名前を言う。	古屋恵子 片桐文雄	荒明美奈子
8	平成29年2月22日 (水) 15:00~16:00	1	川崎市立宮 前小学校	5	親子教室2	(保護者)参加者同士の関係作りをする日本語を学ぶ。ガイドブックを見ながら、日本の学校生活・学用品を知る。1日のスケジュールから学校用語を学ぶ。質疑応答/(子ども)絵本の読み聞かせ。トイレ・水飲み場の使い方を知る。学校で使うものの名前を覚えよう。折り紙を折ろう。ありがとう(友だち)・ありがとうございます(先生など)を使い分けを学ぶ	古屋恵子 片桐文雄	荒明美奈子
9	平成29年3月8日 (水) 15:00~16:00	1	川崎市立宮 前小学校	8	親子教室3	(保護者)ガイドブックを見ながら入学式など学校行事の言葉を学ぶ。楽しく登校するための毎日の生活習慣について話し合う。質疑応答/(子ども)絵本の読み聞かせ。名札の付け方・外し方。じゃんけん遊び。ごめん(友だち)・ごめんなさい(先生など)の使い分けを学ぶ	古屋恵子 片桐文雄	荒明美奈子
10								

(1) 特徴的な活動風景(2~3回分)

○取組事例①

【第1回 28年8月3日】

1. 4回の学習の目標を説明する。
2. 自己紹介をする。
3. 川崎生活事業所環境局の職員から、家庭ゴミの行き先やゴミの減量等の説明を聞き、ビデオを見る。
4. ゴミの分別をゲームを通して学ぶ。解説を聞きながら、川崎市のゴミの分別の仕方を詳しく学ぶ。自分の町内会のゴミの日を確認する。
5. ゴミについての質問をする。
6. まとめ



○取組事例②

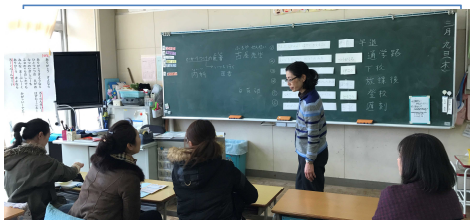
【第9回 29年3月8日】

<保護者クラス>

1. 自己紹介をする。
2. ガイドブックに載っている学校行事の語彙を学ぶ。
3. 入学式に持ってくるものを確認する。
4. 通学等(登校・下校・通学路・放課後・早退・遅刻)に関する語彙をやさしい日本語で学ぶ。
5. 入学までに身につけておく生活習慣の語彙を学ぶ。

<子どもクラス>

1. 呼名をしたら、手を挙げて返事をする。「わたしは～です」と名前を言う。
2. 絵本の読み聞かせをする。
3. 名札の付け方・外し方を練習する。
4. 謝る言い方(友だちにはごめん、先生等にはごめんなさい)を練習する。
5. ジャンケンの仕方を学ぶ。



(2) 目標の達成状況・成果

A.取組後に実施したアンケートや、発言などから、以下のことがわかった。ゴミと環境をテーマにしたことで、ゴミを減らす工夫や、3R(リデュース、リユース、リサイクル)に取り組もうという意識が外国人市民に生まれた。ふだんの生活で使わない、環境に関する新しい語彙を学べた。学習後、家族にゴミの分別等を教えたという日本語学習者もいた。

B.明日から実践する、という職員が多数おり、特に保育にかかわる職員は、保護者に必ず見てほしいこと、してほしいことがあるため、これまでの工夫は正しかったという自信が持てたり、さらに工夫しようと意欲的になった。窓口対応の職員も、コミュニケーションの視点がはっきりしたことで、来所者との会話や通知文書の紙面の改善を図ろうという意識が生じた。また、区役所主催による、やさしい日本語研修の複数開催につながった。

C.やさしい日本語や通訳を通して、入学前に準備しなければいけないこと、入学式当日の流れ、学校生活・学校での学習を念頭においた日常生活についての知識が得られ、安心できた。

(3) 今後の改善点について

A.ゴミの出し方は知っていると考える外国人が多いので、単なる方法論ではなく、トラブルなく地域に溶け込むためのルール遵守の意識が持てるよう、環境学習のように、日本人がよく話題にする、学習者に知りたい、と思わせるテーマとあわせるようにすること。

B.行政職員は2年ほどで異動してしまうので、当団体が研修を主催することで、各区、各部署に広がっていくような働きかけが如何にできるか、ということ。

C.外国人で必要な人たちに周知するために、チラシを多言語化したほうが良いことや、配布先に幼稚園も含めたり、保育ボランティアの人などにも知らせる工夫が必要であること。

4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

・対話型の活動を通して、外国人市民が排斥されることがないように、市民同士(母語話者も非母語話者も)お互いの関係性を構築し、さらに事業を通して行政関係機関との関係を深め多文化共生のまちづくりに寄与する。外国につながる子どもたちや外国人等市民は、自分の気持ちを日本語で書いて表現し関係性を築ける日本語の力や生活に必要な情報を読み取りやさしい日本語に言い換えるプロセスで日本語を習得する。地域住民(母語話者)や行政関係機関等の職員は、地域に住む外国につながる子どもたちや外国人等市民の課題を知り、理解を深め、ともに学びあう活動にする。

(2) 目的・目標の達成状況・事業の成果

・日本語学習者および日本語サポーターのアンケート、インタビューの検証より、日本語学習者は日本語サポーターとの対話型の活動で、自分のことを表現したり、生活に必要な情報を得たりすることができたことがわかった。そして、取組の中で、自分にとって必要な語彙や文型を学ぶことができ、日本語能力が上達したという感覚を得て、日本語学習に対する意欲の向上もみられた。また、日本語サポーターも、対話型の活動の中で、相手がわかるやさしい日本語を使おうと試行錯誤したことがわかった。その結果、相手の思いを引き出したり、お互いに自分のことや生活習慣について語りあったり、それぞれの経験や考え、国での様子なども知ることができた。対話型の活動を通し、信頼関係が築け、お互いを深く理解することができたと思われる。そして、取組1に参加した日本語学習者が、引き続き取組2にも参加した。

・初年度の日本語学習者が、翌年は日本語サポーターとして、そして今年度はスタッフとして活動に関わり、母語を介しての対話型の活動は日本語学習者にとっても安心できる場となったようだ。母語でやりとりする場面は、日本語でのやりとりしている時の表情より和らいでいるように見えた。また、バイリンガルサポーターは、日本語学習者の将来のモデルとなるのではないかとと思われる。

・行政関係機関の職員と外国人等市民によるワークショップ形式のやさしい日本語の研修は、今年度は多文化共生保育研究会とも連携でき、保育現場での切実な思いが伝わってきた。日頃から外国人保護者と接している保育園や子育て支援センターなどの職員が、やさしい日本語でコミュニケーションをする必要性を感じ、やさしい日本語への言い換えに熱心に取り組む様子がみられた。その思いが行政関係機関等にもつながり、今年度は川崎区や幸区の区役所の主催のやさしい日本語研修や子育てボランティア研修と、さらなる広がりをみせた。来年度は教育委員会主催で、やさしい日本語研修も検討されているようである。外国人等市民とのワークショップ形式のやさしい日本語講座は地域で広がりをみせている。

・取組2の活動や区役所のやさしい日本語の研修で職員や子育てボランティア等を対象に、DST作品を上映し、地域の外国人等市民の思いを伝えることもでき、異文化理解が深まったのではないかとと思われる。また、DST作品は、日本語学習者が所属する地域の日本語学級で日本語ボランティアや担当職員、ほかの日本語学習者にも見てもらえ、視聴者から称賛の声が聞けた。制作者である日本語学習者はうれしそうに感謝のこたえを述べ、関係性はさらに深まったのではないかとと思われる。

・取組会場を他区に移すことや新規プログラムを取り入れることで、新たな日本語学習者の参加があり、出会いの機会が増えた。

・それぞれの取組に行政・教育関係機関からの職員の参加、見学があり、外国人等市民の現状や課題を知る機会となったと思われる。

(3) 地域の関係者との連携による効果、成果等

・取組には、地域の日本語教室のボランティアが、日本語サポーターとして参加した。日頃の日本語教室での様子とは違う一面を見せた日本語学習者がいたことに気づいた場面もあったようだ。本事業は、対話型の活動であるため、日本語学習者のそれぞれの日本語レベルに合わせて、相手に伝わるやさしい日本語で対応する必要があった。相手の話を聞く姿勢やほかの日本語サポーターやスタッフから質問の仕方・タイミングを学ぶことができたようだ。

・幸区多文化共生推進事業実行委員会との連携により、地域の多文化共生のためのイベントで、学習した成果（作文やDST作品）の発表ができ、地域住民への発信はできたと考えられる。そのDST作品を観た方から外国人の集住地区でDST作品作りをしたいという希望があり、準備講座などが始まっている。また、実行委員会が実施する多文化共生のイベントに、日本語学習者が参加し、地域で双方向に、人と人のつながりができつつある。

・やさしい日本語講座では市役所との連携の輪が広がり、区役所主催によるやさしい日本語講座も実施でき、その講座でDST作品の上映をし、地域の外国人の思いを行政関係機関の職員にも発信でき、生活者としての外国人の理解を深めるきっかけになると考えている。

・これまで制作したDST作品の貸出も始めた。日本語教育機関や大学等からも貸出の希望があった。上映会の視聴者から、地域で外国人の受入をしている団体向けに作品上映をしたいという希望もあった。

・今年度初めて取り組んだ親子教室では、今年4月に入学する親子の就学前のプログラムを実施した。保護者は日本での学校教育の経験がなく、また地域に知り合いも少なく、子どもの入学に対し相当な不安があったようだ。その保護者からとても安心できたという声があった。

(4) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

・広報は、各取組につきチラシを制作し、実施会場や地域の日本語教育の活動をしているグループに配布した。タウン紙や新聞各社にも告知をして、数社が記事として取り上げてくれた。

・成果発表として、地域の多文化共生イベント等でDST作品の上映会をしたり、文集の作文の展示を行った

・成果の発信は行政関係機関や取組に参加した行政関係機関の職員部署等に報告書と『やさしい日本語』の例文集を送付する。

(6) 改善点、今後の課題について

・3つの取組を通しての本年度の事業で見えてきた新たな課題や今後の改善点について

①現状の課題

(1)取組の実践内容は、日本語学習者の実態に合わせ、改良しながら継続している。初年度から毎回参加している日本語学習者もいるが、本取組は単発で回数も限られているので、学習意欲が向上した日本語学習者は、継続的に行われている地域の日本語教室で学ぶことも必要だ。地域の日本語教室と学習内容などの情報を共有したり、双方で相乗効果が出るように連携して地域の日本語教育の体制を整えていく必要がある。

(2)保育園が増設される中、外国人等市民の利用も増大して、保育園と保護者との文化習慣の違いが顕在化していることがわかった。就労で社会参加はしているが、地域のつながりがあまりなく、地域での子どもの安心安全の確保ができず不安な様子もみられた。また、地域に日本語学習の場があることを知らない外国人等市民もいることもわかった。知っていても時間的に合わない場合もあり、様々な曜日や活動をする地域の日本語教室が必要である。

(3)本事業の取組の中で、実践している対話型の活動のための日本語サポーターの基本姿勢はこれまでの取組の中からまとめ、説明会を実施した。しかしながら、日本語サポーターのアンケートやインタビューより、どこまで聞いていいのか、どこまで日本語で言語化すればいいのか、思い込みで聞いていたなどこれまで地域で日本語ボランティア活動をしていた日本語サポーターも対話型の活動に対応できなかったり、初めて本活動に参加した日本語サポーターには戸惑いがみられる場合もあった。

②今後の改善点

(1)今年度、取組の活動の実施会場を他区で実施した結果、新たな新規学習者が得られた。今後も新たな会場、活動を検討していきたい。そして、その日本語学習者とも関係性をつなげていく活動を長期的に考えていきたい。

(2)新規の活動の広報、参加者募集には苦慮した。本事業の広がりのなかで、関係性が築けた行政関係機関と連携・協力していくことで今後はもっと広く広報に努めたい。また本事業の参加者で上級の日本語学習やバイリンガルサポーターに協力してもらい、チラシの多言語化をめざしたい。

(3)対話型の活動における日本語サポーターのトレーニングが必要である。また、対話を促進するための通訳ができるバイリンガルサポーター（外国人も日本人も）の適宜活用も検討していきたい。

(7) その他参考資料